

今こそ「文化力」



十五代 沈 壽官

去る7月13日(月曜)NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」の鹿児島特集の上映があった。そのクライマックスに登場した父14代、入院氏の電話の場面に対して、全国からの反響は凄まじく、弊社のホームページのサーバーはダウンしてしまった。

私の携帯にも番組中に250件を越すライン、メール、メッセージが飛び込んできた。

それらに全てリターンすることは不可能であったが、久しぶりの方々との繋がりも確認できた。あの番組の国民的人気を改めて痛感した次第である。

生前の父14代と、入院重朝先生、それに笑福亭鶴瓶師匠、一流の役者が三人揃った事により見事な流れが出来た。

荒んだコロナ禍の中、久しぶりに気持ちちがホッコリとなる番組で、失われた薩摩の人間力を見れた良い機会となった。

又、これに亡き入院貞子さんの笑顔と故司馬遼太郎先生のエピソードが加わった事で、一気に立体感が出た。泣き笑いのひと時であり、「鶴瓶の家族に乾杯」史上、名作の部類に入る出来栄えだったと思っっている。(身びいきか?)

事ほど、こうゆう時代だからこそ、心温まる感動が必要なのだ。

素晴らしい音楽、圧倒的な大自然の美、絵画や彫刻、舞台など二流の文化が人心を癒し、明日への希望を抱かせる。「人はパンのみにては生きられず」なのである。大切なのは、全

てを生み出す「心」であるはずだ。

多くの方々から「番組を見ていて涙が止まらなかつた」との声を頂いた。凍てついた心が溶けて、熱い涙が溢れてくる。これこそが人を生かす「文化力」なのだろう。

「上質なローカルを高度なアナログで」これが私の経営の信念である。

明治維新150年とは、官による日本均一化の歴史に他ならない。全ての面において、遅れていたと思われた日本を、国際基準を満たす国に向上させねばならなかつた大事業である。しかし、明治という近代国家の誕生と共に生まれた官僚システムが取り仕切る国家は、当然ながら微調整が効かない。「全国一律」が前提なのだから。

その中で、各地に息づいてきた個別の風習、訛り、土地の名産、などなど風土にまつわるものが残念ながら徐々に姿を消していった。

残ったのは代表的なものばかり。

たしかに、津軽弁と薩摩弁では会話は不可能であろう。だから標準語が必要となる。しかし、それは方言を捨てるという事では、本来無かつた筈なのだ。

江戸時代、漢方を学んだ医師たちが、明治に入り西洋医学を学ぶと東洋医学を捨ててしまった。何故、それまで積み上げてきた東洋医学と新たな西洋医学を融合させなかつたのか？

「維新」とは、「これ、新たなり」という意味である。それを、捨て去ると、考えてしまったのだろう。廃仏毀釈もしかりであろう。

本来日本人は「保存と活用のみ」であつた。大陸や半島から渡ってくる人や物や情報を大切に、腐らせる事なく活用する事で社会を築きあげてきたのだ。東の最果ての島に暮らす人々は大陸や半島からの新しい知識を心

待ちにしていたのだ。

江戸時代、世界にいくつが存在した100万都市は日本にも四つ存在した。江戸、京都、大阪、堺。この四つの百万都市は植民地（コロニー）を持たずに、自立して存在した完全なる循環型社会であり、世界に例がない。まさに先進都市であった。

6世紀、朝鮮から仏教が伝来した当初、神道と激しく対立した。それが、蘇我氏と物部氏の争いである。

しかし、その後、源信の往生要集に見られる「天台本覚論」へと至る。すなわち神仏習合であり、「草木国土悉皆成仏」の思想が生まれたのだ。世界に例のない日本独自の宗教哲学である。これにより、末法思想の中で人々は希望を持ち得た

それが明治という西欧型の近代国家に変わると、西欧のやり方を真似し始める。そ

の中で、それまでの自分達の価値観を否定する様になった。

頑迷な朝鮮王朝や、清国から軽蔑されたのも領ける。チョンマゲを散切り頭に変え、下駄を脱ぎ革靴を履き、肉食を禁じていた人々が牛鍋に舌鼓を打ち、鹿鳴館でダンスに興じる。

しかし、では西洋が「保存、活用」をしないかと問えば、そうではない。ヨーロッパの各都市は第二次大戦で破壊された都市の風景を忠実に再現した。文化遺産は必ず残す。すなわちストックの社会である。昔の日本の様に。

今の日本はどうだろう。文化は民間のやる物だという。しかも、「文化で腹が膨れるか？」というレベルの方も多い。

文化は一朝一夕に作られるものではない。文化とは「way of life」であり、そしてその

文化を共有する個体を「民族」と呼ぶのだ。

我々は藩を挙げて創り守って来た固有の文化を、「維新」の名の下に捨て去ろうとした。日本を均一化する工程の中で、守らなければならなかった物を遺棄して来た。

今、この様な時代になったからこそ思う事は、文化が地域の意識を繋ぐものであり、その中でも上質な物を伝えていかなければならない。それが「不易」である。

変わらないもの、動かないものがあるが故に、それが不動の指針となり、他を動かすのである。

動くものは動かないものに動かされている、という事を思う時、決して失ってはいけない不動の物が如何に重要か気づく。

この荒んだ人心を潤すものは「文化」である事を強調したい。

